

野鳥だより

—北海道—

ISSN 0910-2396

北海道野鳥だより第190号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成29年12月21日

カラフトムシクイ



2017. 11. 1 札幌市 豊平公園

撮影者 中村 隆 (札幌市南区)



も く じ

2017年モエレ沼は水鳥家族で大賑わい
 —カンムリカイツブリ、バン、オオバンの繁殖—

札幌市北区 樋口 孝城	2
大雪山、登山で出会った鳥たち 紋別市 大館 和広	4
シュミット半島(サハリン)での鳥類調査 美唄市 藤巻 裕蔵	8
シマアオジの回復保全を願いながら —マイフィールドの鳥類標識調査と鳥たち— 江別市 富川 徹	10
野鳥情報コーナー 厚岸臨海実験所でブッポウソウ 札幌市北区 北沢 宗大 釧路管内厚岸町 井坂 友一	11
石狩浜でオオチドリを確認 江別市 中田 達哉、須田 桂子、津山沙央莉	12
探鳥会ほうこく	12
表紙の鳥(カラフトムシクイ) 札幌市南区 中村 隆	15
探鳥会あんない	16
鳥民だより	16

※本誌に掲載する写真のカラー版は、当会ホームページ(<http://www.aigokai.org>)で閲覧することができます。

2017年モエレ沼は水鳥家族で大賑わい —カンムリカイツブリ、バン、オオバンの繁殖—

札幌市北区 樋口 孝城

2017年のモエレ沼(札幌市東区)は、マガモ、カルガモ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、バン、オオバンの6種もの水鳥の繁殖で賑わいました。モエレ沼は豊平川が残した河跡湖で、沼の内側はモエレ沼公園として、四季を問わず多くの来園者で賑わっています。また、毎年4月には北海道野鳥愛護会(以下、愛護会)の年度最初の探鳥会が行われております。

ここでは上述の6種のうち、カンムリカイツブリ、バン、オオバンの繁殖について報告します。なお、この報告は樋口だけの観察によるものではなく、何人もの愛護会会員による観察を樋口がまとめたものであることをおことわりしておきます。

カンムリカイツブリ

モエレ沼では初めてと思われる繁殖羽のカンムリカイツブリ2羽を私が見たのは7月17日のことでした。実はその2週間ほど前の7月4日に、後述するバンとオオバンのヒナを見ていたので、その日は彼らの様子を見に行ったのですが、思いがけなく繁殖羽のカンムリカイツブリを目撃しました。これは珍しいということで愛護会ホームページの野鳥情報伝言板に書き込んだところ、早速見に行った会員の一人から、「背中にヒナが乗っていましたよ」という知らせと写真をメールで送っていただき、びっくりしました(写真1)。繁殖羽個体の飛来どころか、実際に繁殖まで起こっていました。

それからは、何人にもよる観察が断続的に行われてきました。ヒナは3羽でした。カイツブリ類に特有の、あの縞模様顔が何とも言えず可愛らしく見えました。親2羽は共同してヒナへの餌やりに励んでいました。ヒナは初めのうちは3羽一緒にどちらかの親、あるいは1羽と2羽に分かれて別々の親の背の上にはいましたが、徐々に水面に降りるようになり、やがてはすっかり水面生活者になりました。このあたりでは自力で餌を取れるようになっていたようでした(写真2)。



写真1. カンムリカイツブリの背に乗るヒナ 2017. 7.19
 (写真撮影: 大橋 晃さん)



写真2. カンムリカイツブリの親子 2017. 8.19
(写真撮影：筆者)

9月下旬頃には子たちはどうやら親離れしたようです。沼のどこかにはいるのですが、時間をかけて探さないと見つけにくくなりました。この記事が皆様の目に触れる12月下旬には、沼は雪と氷に覆われており、どこか暖かい地域に移動しているはずです。

バンとオオバン

前述したように、私がバンとオオバンのヒナを見たのは7月4日のことでした。前年2016年までの段階で、バンについては幼鳥の目撃があるところから繁殖しているだろうとみなされていたのですが、オオバンについてはそれらしい話は聞いていませんでした。ただ、もしかしたらという情報が2016年秋に得られていたので、一応見ておこうという程度のもエレ沼行きでした。

外周道路を水郷北大橋（人道橋）から水郷西大橋方向に少し行ったあたりで、まずオオバンを見つけましたが、見慣れたオオバン2羽と一緒に、小さくて体は黒く、頭から額、さらに嘴基部あたりが赤いヒナ4羽が動いていたのを



写真3. バンの親子 2017. 8. 6 (写真撮影：吉中宏太郎さん)

見てびっくりしました。続いて、さほども離れていないところにバン2羽がいて、そのすぐ傍には1羽だけですが、これまたヒナを見てまたびっくり。オオバンのヒナとそっくりでした。

早速、愛護会の何人かの方々に連絡しました。バンとオオバンの繁殖経過を見ていくには、私一人だけよりも何人かの方がいいに決まっています。

両種の繁殖状況を大雑把にまとめると、バンは5家族ぐらいで、1家族の子は3～6羽（写真3）、オオバンはもっと多く、10家族ぐらい、子は同じく3～6羽といったところでした（写真4）。両種とも2回繁殖をしたようで、その進み具合が違うことから、全体を見ると1番子と2番子が入りまじり、小さなヒナから、もう幼鳥と呼んでもいいくらいのもまで、いろんな大きさのものがいました。また、オオバンでは成長した1番子が2番子の面倒をみるという、ヘルパー行動らしきものが観察されました。

ともかくも沼のあちこちで子供たちは育っていき、9月下旬ころまでには、両種とも嘴基部などの赤はなくなりました。その後、バンは額板が赤くない幼鳥の顔つきになり、親とは違う顔つきになってきました。一方、オオバンは、それほど間をおかず額板がだんだん白くなっていくようでした。そのうち、家族が一緒にいても、親子の区別ができなくなってきました。



写真4. オオバンの親子 2017. 7.10
(写真撮影：早坂泰夫さん)

もエレ沼にはバンはずっと前（少なくとも十数年以上前）から少数見られていたのですが、オオバンは見られただけでも話題になった希な鳥でした。増えてきたのは10年ほど前からです。最近では随分と増えてきて、とうとう繁殖確認にまで至りました。

最初に書いたように、もエレ沼といえば春と秋のカモ類で、その時期しか行かないという人が多いかもしれません。来年は夏にも行って、水鳥たちの家族を楽しんではいかがでしょう。

大雪山、登山で出会った鳥たち

紋別市 大館 和広

はじめに

山に登り始めたのは39年前、1978年6月の利尻山が最初でした。登山で鳥を意識したのもこの時で、足元もおぼつかない濃いガスと強風の中、白い闇の中から現れた紅色のギンザンマシコの記憶が鮮明に残っています。けれどそれは記録を付けるきっかけにはならなかったようで、山行ノートの始まりは何故か1979年9月です。更に双眼鏡を持って登るようになったのは1990年頃だったと思います。記録という形では残してはいませんでしたが、山行ノートの中には断片的に鳥の事は書いてありました。その中には埋もれさせたくない記録もあって、今回無理を聞いてもらって書かせていただくことになりました。本当はもっと格調高く学術的論文風に書きたかったのですが、私の文章力ではエッセイ風にしか仕上げられなかったのをお許しいただきたい。

今回35年分の記録から、公表しておきたい記録と私が気になる記録を選び出して一覧にしたのが表1～表3です。使用機材は8倍双眼鏡が主で、3年ほど前から20倍のスコップを持って行くようになりました。残念なのは長いレンズは重くて持って登れないので(若い頃は持って行きましたが)写真がほとんどないことです。

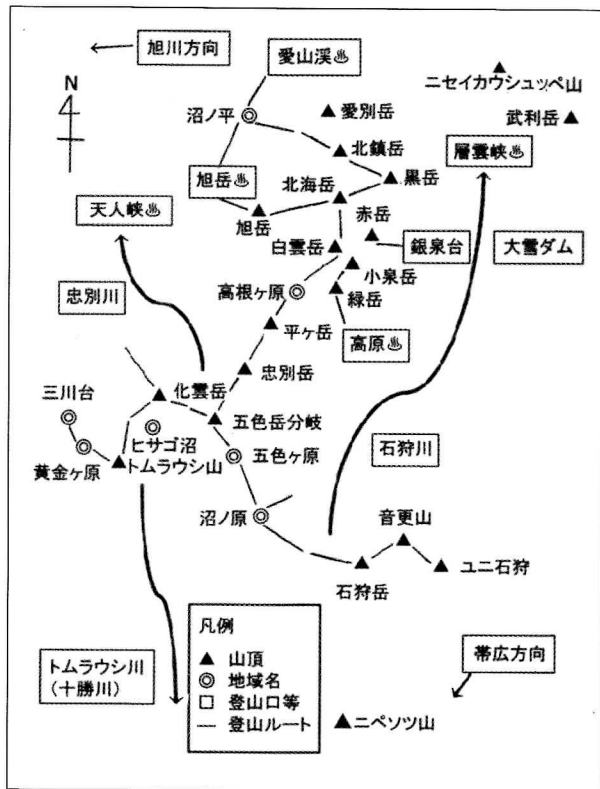


図1. 大雪山概念図

私が山に行くのは6月末から10月初めまでで、年間10回ほど山行をします。日帰りが6回くらい、山上1泊が3回くらい、そして一度は5泊くらいでトムラウシ山へ行くのが毎年恒例となっています。行く山域はほとんどが大雪山です。理由は単に近いからです。移動の時間が掛らないというのはとてもいいことだと思います。毎年同じ山に行っても山は違う表情で出迎えてくれるのです。

私の場合、山に登るといのは高山植物と山岳風景を楽しみながら歩くためで、鳥は二の次でした。夏なら囀りで(耳で)解るけど秋などは探さないと見つけれませんからね。30kgの重いザックを背負ってのそれは難しいのです。特に猛禽類は上空を飛んでいることが多いので見つけるのは偶然に支配されているのです。この頃は見るポイントを決めてあり、時間があればそこで眺めるようにしています。

1 猛禽類

① シロフクロウ

初めての出会いは夕張岳でしたが表に入れてあります。山頂の緑のハイマツの中に真っ白なフクロウがいました。道もなく寄れずにいると、ふわりと飛んで視界から消えました。一瞬に近い出来事でした。

大雪山では84年にトムラウシ山周辺で越冬した個体が見られました。私は秋に登った時、距離は遠かったが見ることができました。この時の記録は誰だったか忘れていましたが、のちに雑誌「アニマ」に素晴らしい写真と共に掲載されました。84年は確か知床硫黄山でも記録されていた筈です。

85年には北海岳山頂で飛んで行ったのを一瞬見ることができました。

シロフクロウには大雪山の高山環境は、生まれ育った極北のツンドラを思い起こさせたことでしょうか。レミングの代わりはナキウサギだったのでしょか。

② イヌワシ

それらしき鳥にはあちこちで遭遇してはいますが、イヌワシと識別できたのは94年の一度だけです。この時私はナキウサギを見ていました。気が付くと上空から大きな鳥が飛んで来て500mほど先の岩上に止まりました。双眼鏡の中に見えたのは紛れもないイヌワシの成鳥(と思った)でした。急いで接近しましたがいつの間にか消えていました。写真を残せなかったのが残念でした。

以後、山に入るたびに探すのですが出会ったことはありません。私の多分かなわないだろう夢は、残雪の大雪山を背景に飛ぶイヌワシを撮影することです。

③ タカの渡り

北海道でタカの渡りと言えば秋の地球岬が有名ですが、私は大雪山の上空も地形を利用してタカが南下すると思っているのです。地図を見ると判りますが北海道の中央部に南北に1500mを超える台地が連なる大雪山は、渡りをする鳥にとって絶好の地形ではないのか?と思うのです。それを裏付ける観察記録は多くはありませんが、オオタカやハチクマは南へ渡る個体を観察したのだらうと思えます。89年9月に白雲岳山頂で見たハチクマは、私の横数十メートルの処を飛んで、一直線に南を目指していったのでした。

しかし、9月上旬からの高山の天気は安定せず、渡りに適した天候がどれだけあるのか、など沢山の疑問は尽きないのですが。

表1. 猛禽類 (1982年~2016年)

種名	観察記録
ミサゴ	2006.8.6 武利岳山頂(1)
ハチクマ	1989.9.10 白雲岳山頂(1) 1994.9.7 五色岳分岐(1)
トビ	1983.8.25 黄金ヶ原(3) 1994.9.10 化雲岳一五色岳分岐(1)
オオタカ	1983.9.18 白雲岳山頂(2) 2015.9.23 五色岳分岐(1)
ハイタカ	1994.9.10 化雲岳一五色岳分岐(1)
ノスリ	1994.9.10 化雲岳一五色岳分岐(10) 2012.8.18 ニベソツ山天狗平(6)
ケアシノスリ?	1982.9.8 愛別岳山頂(1)尾羽模様で識別
イヌワシ	1994.9.8 トムラウシ山 ロックガーデン(1)
クマタカ	2003.9.15 石狩川本流林道(1) 2004.7.17 白雲岳小屋上空(2) 2007.7.1 平山ニセイ分岐(1)
シロフクロウ	1984.6.25 夕張岳山頂(1) 雄成鳥 1984.9.15 トムラウシ山付近(1)~18日まで 1985.7.18 北海岳山頂(1)
キンメフクロウ	1997.6.12 大雪ダム上流(1) 夜中に声
トラフズク	2012.6.30 西クマネシリ山 山頂で羽を拾得
チョウゲンボウ	1992.9.18 赤岳山頂(1)
チゴハヤブサ	2000.9.23 安足間岳山頂(3) トンボ捕る
シロハヤブサ	1986.10.7 武利岳山頂(1)
ハヤブサ	1982.9.8 愛別岳一比布岳(1) ※ 1982.9.18 安足間岳付近(5) ※ 1983.9.18 小泉岳一緑岳(1) 1985.9.12 雲ノ平 (十勝岳) (1) ※ ※チゴハヤブサの可能性あり
不明ワシ	1982.8.17 沼ノ平、松仙園上空(2) ミサゴ? 1989.9.10 白雲岳上空(1)

※ () 内数字は個体数

2 水鳥

① 渡り鳥は大雪山を越えるのか

大雪山でよく私が暮営するのは、沼ノ原、ヒサゴ沼、トムラウシ南沼です。記録の多くはそこでの記録ですが、非常に興味深い事実があります。

表2を見てください。これだけのシギの観察記録があります。何故、こんな高山の湿原に現れるのでしょうか。それを推測するには沼ノ原、ヒサゴ沼の地理的位置を確認してほしい(図1)。石狩川の最上流部から続く沼ノ原湿原は標高1500mに広がり、大雪山では最低部です。ヒサゴ沼もまた忠別川の上流からコルを越えたところにあり、その先はどちらも十勝川に通じています。

記録の中で特筆すべきはアカエリヒレアシシギでしょう。大きな町の光に誘引されたとも考えられますが、この鳥もまた目的地へ最小のエネルギー消費で飛ぶために、最低コルを越えていくのでしょうか。

話は私のフィールドであるコムケ湖に関連します。地理的に見てコムケ湖を利用する渡り鳥の凡てが大雪山を越えて南下して行くわけではないでしょうが、コムケ湖⇄十勝方面には確実に渡りのコースが存在します。ハクチョウ、ガン、シギ、そしてタンチョウも? 推測するに鳥たちは渚滑川沿いを遡り(湧別川も)、最低コルを越えて石狩川上流に出ます。そこから一部は石狩川を下り南下していきます。また、別の一部は上流に向い大雪山の最低コルである沼ノ原を越えるのです。

これを実証するにはもっとたくさんの観察記録が必要です。特に観察しやすいハクチョウの記録がないのは不自然と感じる人がいるでしょうが、ハクチョウの渡りの時期には大雪山はすでに冬、登山口に至る林道は閉鎖され山には登れないのでした。

ともあれ、沼ノ原を超えるヒシクイ(声で気が付いた)やコガモの群れを見た時は言葉では言い表せられない程の感動を覚えたのでした。

② アオサギ

ヒサゴ沼上空をアオサギがよく飛んでいます。時期から考えると、日常の移動ルートとして使っているのでしょうか。旭川方向から十勝方向へ移動するのでしょうか。早朝の目撃が多く、夕方から夜間に声も聴きます。

ここでまた一つ疑問があります。アオサギに及ぶ危険です。日中に飛ぶとイヌワシに襲われないかな。以前発信器を付けたヒシクイの電波が大雪山中で途絶えたのは、イヌワシに襲われたのではないかと推測がありました。でもアオサギは夕方から夜中、早朝にかけて行動しているようですのでその点は安心なのでしょうか?

表2. 水鳥 (1982年~2016年)

種名	観察記録
ヒシクイ	沼ノ原湿原2006.9.24(6) 11:30コル越え南へ
コガモ	沼ノ原湿原1990.9.17(1), 2015.9.21(8) 8:20 コル越え南へ
アオサギ	ヒサゴ沼上空1990.7.23 (6), 2008.7.26夜中に 声2回, 2014.7.20(1) 十勝方向へ 2016.7.16(2) 19:45~声 沼ノ原湿原2004.7.27(1), 2004.10.9 (足跡)
コチドリ?	沼ノ原湿原1987.8.1(2)
オオジシギ	沼ノ原湿原2005.8.6(2) 高根ヶ原 2006.7.8(1) デイスプレイフライト
タシギ	沼ノ原湿原1988.9.23(1)
タシギ?	沼ノ原湿原1990.9.17(4), 1994.9.7(1)
ジシギsp.	沼ノ原湿原1991.9.1(3)
タカブシギ	浮島湿原 1990.8.6(1) 沼ノ原湿原1988.8.3(1), 1990.7.25(1), 1991.9.1(1), 1994.9.7(1), 2004.8.7(1), 2005.8.6(2), 2014.8.2(1)
キアシシギ	浮島岬 1988.9.19 (路上で死体拾得) 沼ノ原湿原1991.9.1, 2004.8.7 (声)
小型シギ	沼ノ原湿原2005.8.6(2) トウネンサイズ
アカエリヒアシシギ	沼ノ原湿原 2004.8.7 (声) 21:30頃 2005.8.6 (10+声) 20:30頃 2014.8.2 (声) 21:30頃

※ () 内数字は個体数

3 その他の鳥

① マキノセンニュウの記録

私が山に行く時期は毎年大体同じで、同じ時期に同じ場所を歩くことが多いのです。残雪の程度で山の様子は随分と違うのだけどもまあ同季節。

場所は平ヶ岳の標高1700mくらいの湿原で、歩いているとマキノセンニュウの囀りが聞こえたのです。思いがけない処で聞いたので暫く待っていたのですが、ただ一度しか聞けませんでした。翌年も同じ場所でたった1回聞いたのです。

3年目は残念ながらここは歩かなかったのです。環境的にはマキノセンニュウがいてもおかしくはないと思います。確実に検証したかった記録です。

② ヒバリの記録

97年になって突然ヒバリの声になりました。それまでも聞いていたのかビンズイと混同していたのかは定かではありませんが記録していません。その気になって観察するとあちこちで囀りが聞こえ、空高く昇っていくのも見ました。ヒバリはほぼ大雪山全域に生息(繁殖)しているようです。環境的にはどうなのか解らないのですが、高山で聞くヒバリの声はなんか違和感があって、この事実をどう考えればいいのでしょうか。

③ カッコウ科の記録

ジュウイチは大雪山の登山口など広い範囲で声を聞いている感じがあります。姿は見たことがありませんけど。カッコウは稜線部でよく鳴いています。

ホトトギスは夜中に声での確認です。大雪ダムで聞いた時は、こちらに向かって飛んできている感じで、声がだんだん近くなってきました。繁殖しているのでしょうか。だとすれば何に托卵するのでしょうか。

④ ノビタキの記録

北海道で平地と高山に出現する鳥と言えばノゴマがいます。他にはビンズイでしょうか。三浦二郎さん(故人)が「平地と高山のノゴマは同じなんだろうか」と言っていたことがありましたが、面白いテーマです。私が見ている限りでは違いは全然わかりません。

ノビタキも平地にたくさんいますが、気にしてみると高山にも結構いるのです。沼ノ原ではかなり以前から見ましたが、標高2000mくらいのハイマツのある処でも見られることが解ってきました。それもほぼ全域にいます。密度はノゴマほどではないように思いますが、「ジジ、ジジ」という声は良く耳に聞こえてきます。虫をくわえてヒナを呼んでいるので繁殖もしているようです。ヒサゴ沼では前年は繁殖していたのに、翌年は見られなかったということがあります。同じところに戻って来ると思うのですが何か理由があったのでしょうか。

⑤ カラ類、キツツキ類の記録

標高2000m以上のハイマツに付いているハシブトガラ、ヒガラ、ゴジュウカラを見るのが少なくありません。ハイマツ帯の鳥と言えばカヤクグリなどがいますが、カラ類が利用できる生物的空間があるということでしょうか。

沼ノ原でヤマゲラの声を聞いたことがありました。下部から森林が続いていますから不思議ではないのですが、意外な感じがしました。アカゲラは結構標高の高い処までいます。

⑥ ホシガラスの集結

ホシガラスは高山に生息し、よく見られる鳥です。でもまるで出会わない時もあるのが不思議です。それはハイマツの実の実り方と関係があるのではと思います。この年は五色岳分岐から化雲岳にかけてのハイマツで多くのホシガラスを見ました。同時にハイマツの実を食べた跡が登山道の至る所で見られました(写真1)。狭い地域でこんなにたくさんのホシガラスと食痕を見たのは38年間大雪山に登っていて初めてでした。個体数は確実に数えられませんでした。50羽は確実に超えていたと思います。視界の中に10羽を見つけるのは簡単でした。きっとこの地域のハイマツの実が豊作だったのだらうと思います。

一つ疑問がありました。これだけハイマツの実があるのに、ヒグマが食べた形跡がまるでなかったのです。フンぐらい見てもよさそうでしたから注意していたのですが見つけられませんでした。そういえば秋にこの辺りでクマの痕跡を見なくなったと感じるのは私だけでしょうか。

夏に登山道脇をよく見るとホシガラスによるハイマツの

種子拡散の痕跡が見られるのです。結構あちこちで見られますから機会があれば探してください。

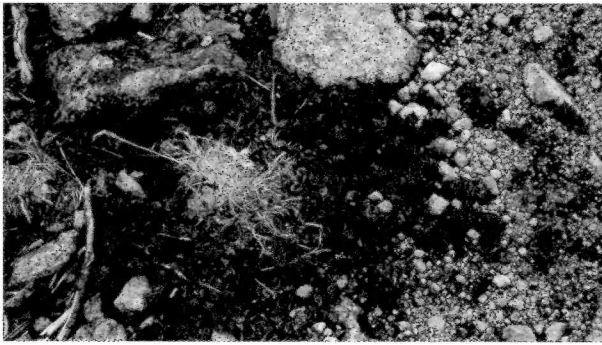


写真1. ホシガラスによるハイマツの実の食跡

⑦ ツグミやアトリは高空を渡って来るのか

これは私の全くの想像です。ツグミやアトリは北から渡ってくる時に、大陸から岬などの平地を経由するのではなく、2000m以上の高度まで上昇してから渡って来て、大雪山などの高山に降るように降りてくるのではないだろうか、そう思いたくなる記録が秋にたくさんあるのです（種名の後に*印した鳥の記録）。私がこの鳥たちに会うのは決まって9月下旬から10月上旬の大雪山登山なのです。9月下旬だと平地はまだまだ秋とは言えず、ツグミが食べる漿果はまだ実っていません。でも大雪山などの高山ではツグミ科の植物の漿果が熟しているのです。ツグミはそれを食べているのかもしれませんが。アトリは何を食べているのでしょうか。オガラバナやミネカエデの実の胚を取り出して食べているのでしょうか。この辺はよく解らないのです。さらに興味深いのはタヒバリとカシラダカの記録です。どちらも高山では初めて見ました。

この疑問を解決するには渡りの時期に空に向かってレーダーで観測する方法が考えられますが、誰か調査してくれませんかね。お金も時間もかかるのでしようけどとても面白いと思うのです。

武利岳で出会ったシロハヤブサも、この事実と無関係ではないのかもしれませんが。

おわりに

こうして埋もれていた記録を改めて書き出す作業は楽しい。全く忘れていた当時の記憶が甦って来るし、その時は思いつかなかった新しい発想で考えたりできます。もっと色々書きたかったのですが紙面の都合もあり、またの機会にします。今回改めて感じたことは記録を付けること、同じ場所を見続けること、継続することの大切さです。小さな記録でも積み重ねていくと、必ず見えてくるものがあるし、年と共に記録の貴重性が増していきます。そしてもう一つは目標をもって鳥（自然）を見ることの大切さです。写真を撮る、珍しい鳥を見てライフリストを増やすことだけで満足するのは勿体ないと思うのです。

今回、長い駄文を載せてくださった愛護会の編集担当の方々、最後まで読んでくださった皆様に大いなる感謝を申し上げます。

表3. その他の鳥 (1982年~2016年)

種名	観察記録
ジュウイチ	石狩岳登山道 1986.7.14(1) 囀り 大雪ダム 1997.6.12(1) 囀り 22:00頃 愛山溪温泉 2001.7.14(1) 囀り
ホトトギス	大雪ダム 1997.6.12(1) 囀り 22:00頃 ユニ石狩登山口2002.6.23(1) 囀り ポンユニ石狩沢2002.6.29(1)
ヤマゲラ	沼ノ原湿原 2015.8.8(1) (声)
ホシガラス	五色岳分岐一化雲岳2015.9.21 (50+) ハイマツの実が豊富
ハシブトガラ	ユニ石狩岳山頂2001.10.7(4) ハイマツ帯
ヒガラ	永山岳山頂 1999.8.9(2)
ヒバリ	赤岳一小泉岳1997.7.12(1), 永山岳1999.8.9(1) 高根ヶ原 1999.7.23(1), 2006.7.8(1) 化雲岳 2000.7.28(1) 北海平 2003.7.23(2), 2012.7.7(2) 2014.7.5(1) 上ホロカメットク山2006.7.28(1) 小泉岳 2009.7.5(1) トムラウシ山2012.7.25(1), 三川台2014.7.22(1) いずれも囀り
マキノセンニュー	平ヶ岳湿原 1982.7.20(1) 囀り 83年も同所で
ゴジュウカラ	白雲岳山頂 1983.9.18(4) ハイマツで
ツグミ*	化雲岳 1988.9.21(8), ヒサゴ沼1990.9.17(1) ユニ石狩岳1993.10.11(40) ニベソツ山2000.10.7(40), 2003.10.5(10) 2005.10.10(2) ニセイカウシュッペ山2005.10.4(5) 2007.10.6 (多数) 五色ヶ原 2007.9.24(2) 愛山溪温泉2010.10.2 (声)
アトリ*	ニベソツ山 1986.10.14 (10±), 2000.10.7 (30+) 2003.10.5 (50+), 2005.10.10(1) ニセイカウシュッペ山 2001.9.23 (50±) 2005.10.4(2), 2007.10.6 (多数) ユニ石狩岳2001.10.7 (50+群), 2006.10.14(10±群) 沼ノ原 2007.9.24 (30±群) 愛山溪温泉2010.10.2 (声)
ノビタキ	ヒサゴ沼1985.9.11(1), 2012.7.27 (繁殖*) 五色ヶ原1988.9.23(1), 上ホロカメットク山 1995.7.18 (繁殖*), 2006.7.27(1) *雌雄で雛を呼ぶ
セグロセキレイ	ヒサゴ沼2009.9.20(1)
タヒバリ*	ヒサゴ沼2014.9.21(4)
ハギマシコ	黒岳1982.9.9(1), 1982.9.19 (20±群), 化雲岳 1990.9.17 (10+群), 平山2014.10.12 (10±群)
カワラヒワ	化雲岳1988.8.3(5), 2004.7.24 (5+)
ウソ	平山 2015.8.3(1) 上二股
カシラダカ*	緑岳 2016.10.1 (2) 1550m付近

※ () 内数字は個体数

シュミット半島 (サハリン) での鳥類調査

美唄市 藤 卷 裕 蔵

シュミット半島はサハリンの最北部に位置する (図1)。サハリンというと、宗谷岬からサハリン最南端のクリルオン岬までは約46km、すぐ近くのようにもおもえるが、最北端のシュミット半島はカムチャツカ半島南端のロパトカ岬より北にある。ここで1998年6月下旬から7月上旬にかけて鳥類の調査を行った。この調査は「極東ロシアの森林ホット・スポット・プロジェクト」の一環として行われたものである。

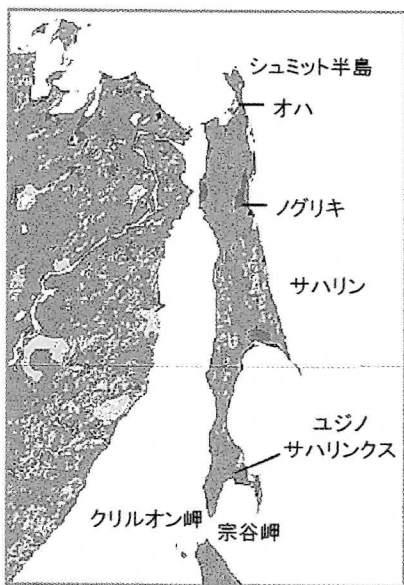


図1. サハリンの概略図

サハリンでの鳥類調査は、このときが3回目であった。1回目は、1994年に自然保護助成基金の助成によるサハリンの自然環境調査の一環として行ったもので、北緯50度以南の森林、草原、河川、湖沼などいろいろの環境の12か所で調査した。2回目は1995年の5月である。このときは自然保護助成基金の助成によって作成したサハリンの稀少鳥類の保護を訴える絵はがきの配布が目的であったが、そのついでに南部で渡り途中のオオハクチョウを観察した。1998年のシュミット半島行きで初めて北緯50度を越えた。

ユジノサハリンスクからシュミット半島までは約800kmである。それほどの距離ではないが、調査地に到着するのに2日間を要した。まずユジノサハリンスクからノグリキまでは列車、夜行で15時間かかった。次にノグリキからオハマまでは路線バスで4時間、オハから調査地までは「ウラル」という6輪駆動の大型車で3時間である。

調査地は北緯54度付近のビルヴォ川中流部で、テント3張りが基地となった。このあたりは森林で、地形にはあまり起伏がなく、標高差にして100m以下である。川沿いはヤナギ類、ドロノキ、ハンノキなどからなる落葉広葉樹の



写真1. 落葉広葉樹河畔林

河畔林である (写真1)。川沿いから50mも高い所に上がるとグイマツ林 (写真2) となり、さらに高い所ではエゾマツ林 (写真3) となる。森林はこの三つのタイプに代表され、このほか高台の森林の中に「マーリ」 (写真4) とよばれる湿原がある。

鳥類調査では早朝3時 (現地時間では5時で、2時間の時差がある) から林内の道路をゆっくり歩きながら出現する鳥を記録してゆく (調査路の長さは0.5~2km、観察帯の幅は片側25m)。調査していて意外だったのは、種類相が南部に比べて非常に単純なことであった。例えば、グイマツ林 (4回調査) とエゾマツ林 (2回調査) ではルリビタキとカラフトムシクイの2種が主要種で、それらにときどき他の種が加わるくらいである (表1、2、個体数は2km当りの平均値、以下同様)。これに対し河畔林 (一部草地を含む、5回調査) ではコアカゲラ、ミソサザイ、シマゴマ、ノゴマ、オオムシクイ、アオジなどが観察され、種数は比較的多かった (表3)。歩いていて、グイマツ林やエゾマツ林から河畔林に入ると鳥の種類相はがらりと変わる。その変り方は北海道では経験したことがないほど見事であった。

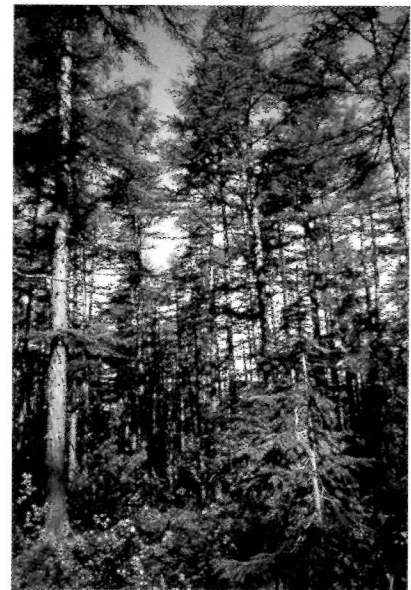


写真2. グイマツ林



写真3. エゾマツ林



写真4. マーリ

私たちの調査隊は5人で、ロシア側は植物研究者のザビロフ博士夫妻、日本側は私と千葉大学の沖津さんで、それにガイド・通訳兼料理長のミハリョフさんである。鳥の調査は早朝なので、日中は沖津さんの植物調査のお手伝いで記録係を務めたこともある。調査期間中ミハリョフさんがずっと炊事をしてくれた。野外調査での食物は保存や運搬の関係で限られてしまうが、調査の中頃からはカラフトマスが遡上し始め、これが野外食堂のメニューを豊かにしてくれた。食事以外で、キャンプ生活での関心事といえば、ヒグマの存在である。キャンプ地の周辺にはヒグマがかなりいるようで、テントから100mも離れていない路上には毎日新しい足跡と糞が見られた。しかし、滞在期間中一度もヒグマに出会うことはなかった。多分、ヒグマの方で人を避けていたのであろう。それに川にはヒグマの好物であるカラフトマスが大量に遡上していたこともあるであろう。最初の計画では3か所で調査する予定であったが、地震で海岸沿いの道路が崩れたなどの理由で、残念ながら調査できたのはピルヴォ川沿いの森林1か所だけであった。

サハリンの鳥類については、生物学・土壌学研究所（ウ

ラジオストク）のネチャエフ博士が17年間にわたって調査した結果を「サハリンの鳥類」（和訳は極東鳥類研究会から発刊）としてすでに発表しており、サハリンの鳥類相と各種の詳しい分布・生態に関する知見は十分得られている。しかし、森林とか、草原とか、サハリンで異なる環境で種構成がどうなっているのかを明らかにした論文はない。シュミット半島におけるこのときの鳥類調査で、森林のタイプにより鳥類相が明らかに異なることがわかった。このような様々の環境における鳥類相の違いは、ネチャエフ博士の著書を読んでも浮かび上がってこない。「百聞は一見に如かず」とはよく言われることだが、このときの調査で、自分の眼や耳で実際に見聞きすることの重要性を再認識した。

なお、このときの調査結果について詳しくは次の論文にまとめられている。

Fujimaki, Y. & Nechaev, V. A., 1999. Summer avifauna of Schmidt Peninsula, northern Sakhalin. Bull. Obihiro Univ. 22: 11-18.

表1. エゾマツ林の鳥類.

種名	個体数
キジバト	+
ツツドリ	+
ルリビタキ	2.7
カラフトムシクイ	7.3
クイタダキ	0.7
コガラ	0.7
ヒガラ	2.0
カシラダカ	0.7
アトリ	0.7
マヒワ	1.3
アカオカケス	1.3
ホシガラス	+
ハシブトガラス	+
+観察帯外の記録	

表2. グイマツ林の鳥類.

種名	個体数
エゾライチョウ	0.4
カッコウ	+
ツツドリ	+
ミソサザイ	0.4
シマゴマ	0.4
ノゴマ	0.4
ルリビタキ	2.4
カラフトムシクイ	6.0
コガラ	0.8
ヒガラ	1.2
カシラダカ	2.0
アトリ	1.2
マヒワ	1.6
ホシガラス	+
ハシボソガラス	+
ハシブトガラス	0.4

表3. 落葉広葉樹河畔林の鳥類.

種名	個体数
イソシギ	5.2
キジバト	+
カッコウ	+
ツツドリ	1.5
コアカゲラ	0.7
ミソサザイ	4.4
シマゴマ	1.5
ノゴマ	2.2
シマセンニュウ	7.4
マキノセンニュウ	3.0
オオムシクイ	6.7
コガラ	1.5
ゴジュウカラ	0.7
アオジ	2.2
アトリ	2.2
マヒワ	0.7
ウソ	0.7
ハシブトガラス	+

シマアオジの回復保全を願いながら

—マイフィールドの鳥類標識調査と鳥たち—

江別市 富川 徹

2015年11月、私の主宰する野鳥勉強会で「特別企画講演会 北海道の希少鳥類を考える集い —夏鳥を減らさないために—」を開催しました。当北海道野鳥愛護会の協力も得ながら実行できたことに感謝し、あらためてお礼を申し上げます。この講演会の趣旨は、個体数が減少し見られることの少なくなったシマアオジやアカショウビンの話題になると、決まって「黙っていたらそれらは北海道では見られなくなるのではないか」「見られなくなった原因は何なんだ」「再び見られるようになるために何ができるのだろうか」などとなるのですが、すでに国の保護増殖事業などで取り組まれている希少鳥類のタンチョウやシマフクロウの保護の現状や課題を踏まえながら「語ろう、考えよう」というものです。

第一部講演会の講師には、シマアオジに関する分野では、中国まで何度も足を運んで状況を調べられた遠藤公男さん（動物文学者）を筆頭に、本種のスペシャリストで当会会員の玉田克巳さん（北海道立総合研究機構）、そして本種など海外保護事情に詳しいシンバ・チャンさん（バードライフ・インターナショナル東京）も東京から駆けつけてくれました。

希少鳥類の保護に関するお話では、タンチョウで正富宏之さん（専修大学北海道短期大学名誉教授）、アカショウビンで嶋田忠さん（鳥類写真家）、シマフクロウで早矢仕有子さん（札幌大学教授）とそうそうたる講師陣よりお話を頂戴し、そのあとの第二部では、全講師とコーディネーターの川路則友さん（元森林総合研究所北海道支所長）を交えたパネルディスカッションが行われました。これら内容についてはここでは割愛しますが、各講師らの有意義で楽しい語らいは会場の熱心な参加者と一体化し、中身の濃い議論に終始しました（詳しくは野鳥勉強会のホームページを参照）。参加者は会場を埋め尽くすほど道内外から95人が参集されました。

この開催が引き金となって、当会会報の「北海道野鳥だより」では早速シマアオジの特集を組むことになり、玉田さんやシンバ・チャンさんの投稿はもとより、会員らの本種に対する想いや感想などが継続的に掲載されました。またその後も、日本鳥学会2016年度大会札幌や中国シマアオジワークショップなどが行われるなど、シマアオジに対する問題意識の高まりをみせるようになり、日本野鳥の会においても本種について多くが語られ綴られています。

そして今年の秋、環境省の「絶滅のおそれのある野生動物の種の保存に関する法律（種の保存法）施行令」の一部改正があり、9月21日から国内希少野生動物種にヘラシ

ギ、チュウビ、シマアオジの3種が新たに追加されました。これを受けて11月26日には札幌市内で環境省主催の「シマアオジ札幌シンポジウム」が開催され、ようやくそれら種の回復保全等に向けての取り組みが始まったといえます。

「北海道の鳥（小鳥）たちは、どこから来てどこに行くのだろうか」といった鳥類の渡りについては誰もの関心事です。それを調べるひとつの方法に鳥類標識調査があり、私も調査員（バンダー）として28年間、道内各地を駆け巡って調査を行ってきましたが、今では野幌森林公園、宮島沼、礼文島を主に調査を続けています。

私は、礼文島はとりわけ多くの鳥類の渡り通過において魅力ある島であると思っており、毎年島を訪れていて、2015年10月（「希少鳥類を考える集い」の少し前の、ちょうど爆弾低気圧と台風23号が襲来した期間）、島の北部で標識調査を行っていました。同月5日の薄暗くなった夕方に回収に行くと、何やら見慣れないホオジロ類1羽がカシミ網にかかっていました。この鳥を網から取り外すも直ぐには種の同定ができず、いろいろ悩んだあげくにシマアオジ（雌、年齢不明）と判断し標識放鳥に至りました（写真1）。これがなんと我が国ではサロベツ湿原でしか見られないシマアオジであると分かれると驚きを隠せず、鳥袋の中には小さな羽毛が数枚付着していたので、「もしかすると道内にいた個体ではないか」とも思い、貴重なサンプルとして採取し、後日山階鳥類研究所にDNA分析を依頼しました（写真2）。

先般、その結果がメールで届き、「種同定ではすでにデータベースに登録された個体の配列と100%一致し、シマアオジと同定されたが、どの繁殖地由来の個体なのかどうかは今回の分析では明らかにならなかった」との結果を得ました。サンプルの不足や不備で分からない部分もあつ



写真1. 捕獲されたシマアオジの雌

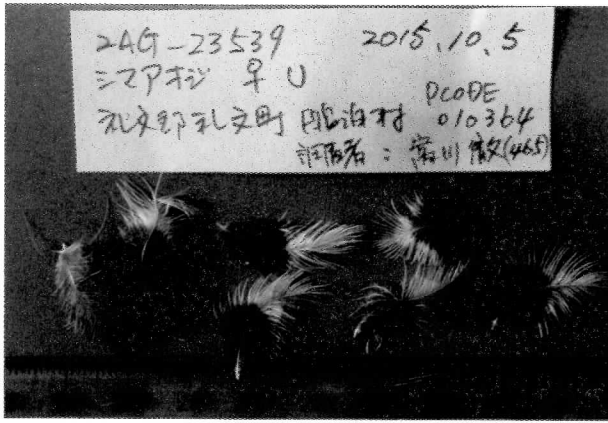


写真2. シマアオジの羽

たと思いますが、わずかな羽根でDNAデータが得られたことに安堵すると同時に、それが道内で再び多数見られることに繋がってほしいと願いました。DNA分析を快く引き受けていただいた、山階鳥類研究所の齋藤武馬さんにこ

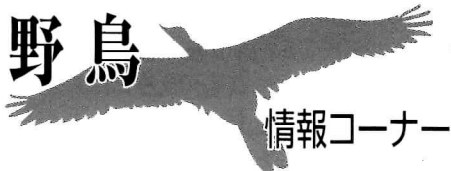
の場をお借りし心よりお礼を申し上げます。

シマアオジの回復や保全対策の取り組みについては、個人的には時間が過ぎたという感はありません。しかし、現状を受け止めながらできることを進めることが大事であり、今後として過去の生息記録の整備や観察場所の保全を行うことその他、回復保全のための国際的な協力体制づくりにおいては我が国が積極的に関わっていくことなどに期待をしたいと思います。

なお、来年の2018年1月に行われる当会の新年講演会では、及ばずながら既に他所で発表した内容もありますが、鳥類標識調査の意義をはじめとして、マイフィールドの野幌森林公園、宮島沼、礼文島の3地域における調査結果の概要を示しながら、シマアオジの捕獲記録なども含めて、これまでに分かってきたことなどの話しを進めます。また、調査地などで観察された鳥たちについても画像で紹介します。

(北海道野鳥愛護会/日本鳥類標識協会)

野鳥

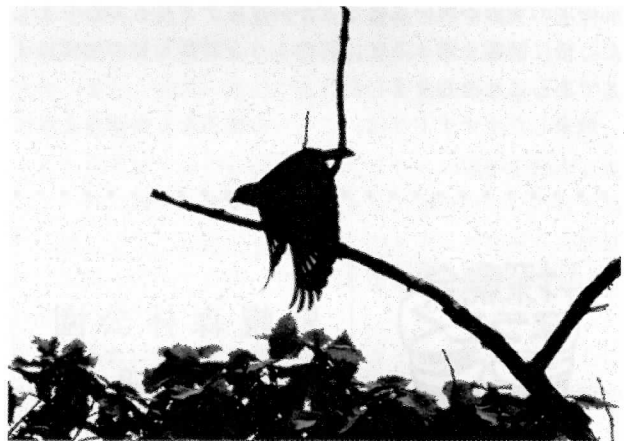


情報コーナー

厚岸臨海実験所でブッポウソウ

札幌市北区 北沢 宗大
釧路管内厚岸町 井坂 友一

2017年6月26日に釧路管内厚岸町愛冠にある、北海道大学厚岸臨海実験所付近にてブッポウソウを2羽観察しました。当日は未明より雨が断続的に降っており、時々晴れ間が広がるような天気でした。実験所裏手にある坂道を下っていたところ、沢を挟んで向かい側の斜面から「ゲー」という北海道では聞きなれない鳴き声を聞きました。ブッポウソウでないかと考え、咄嗟に声がした方を探すとヒラヒラと飛ぶ中型の鳥類を確認できました。一瞬しか姿を確認できず、確信と証拠を得られなかったため、慌てて坂を駆け下りてカメラを取りに戻りました。実験所に戻り、インターネット上で過去の記録を調べたところ、「どうやら厚岸町ではこれまでブッポウソウは記録がないらしい」ことがわかりました。絶対に記録を残さなければならない、という使命感に燃え観察現場に戻ったのですが、ブッポウソウは見つかりません。30分ほど待ったところ再び「ゲー」という声が聞こえ、その方向を双眼鏡で確認したところ、ミズナラの枯れ枝にとまるブッポウソウを確認できました。また、その背後をもう1羽のブッポウソウが飛んでいました。6月26日以降、同所で本種は観察されていないようです。



ブッポウソウ 2017. 6. 26 釧路管内厚岸町

(写真撮影 北沢 宗大)

本種の特徴である初列風切基部の白斑、赤い嘴が目立つ。観察地点の環境はミズナラが優占する広葉樹林の中にある谷であり、尾根部分を飛翔していた。

本種は国内では本州、四国、九州で繁殖し、これまで北海道では繁殖記録がありません。過去の記録を紐解いてみると、本種の道内における観察記録は、渡り時期の日本海側の離島に集中しています。6月や7月は本種の繁殖時期に相当すると考えられますが、この時期の記録は1951～1954年の弟子屈町での記録以降、60年以上ないようです。観察時期や2羽でいたことを考慮すると、繁殖の可能性を棄却しきれません。しかし、今回の観察では繁殖を裏付けるような決定的な証拠を押さえることはできませんでした。いずれ、北海道でもブッポウソウの繁殖が確認される日が来るのではないかと、思える貴重な出会いでした。

石狩浜でオオチドリを確認

江別市 中田 達哉、須田 桂子、
津山 紗央莉

2017年5月3日に石狩市石狩浜でオオチドリ1羽を観察しました。オオチドリは小樽市での記録はありますが、石狩市では記録がないと思われるため、このような形で報告させていただきます。

この日、中田と酪農学園大学環境動物学研究室の学生2人は一緒に空知地方にヒメギフチョウを探しに行っていたのですが、なかなか見つからず、夕方ごろに気分を変えて海にシギを見に行こうとなり石狩浜に向かいました。夕方から移動したため、石狩浜に着いたときには17時半を過ぎており、日が沈み始めていました。

波打ち際には大量のごみが漂着しており、ごみの無い場所でもマガモやオオセグロカモメは見られるものの、採餌するシギ類の姿は無くあきらめて帰ろうとしたときに、車の10mほど手前に1羽の鳥が飛来しました。双眼鏡で観察すると、頭部が白色で、胸部が橙色、腹部が白色、胸部と腹部の羽の境界が黒いことなどからオオチドリとわかりました。後に図鑑を調べると、このような特徴を持つ個体はオスであることを知りました。

飛来したオオチドリは、こちらの様子をうかがうように



オオチドリ 2017.5.3 石狩市 (写真撮影 中田 達哉)

静止したため、ゆっくり観察することができました。夕日に照らされた橙色の胸羽がとてもきれいでした。日本では希な旅鳥として西日本での記録が多いと言われているオオチドリを、まさか北海道で観察できるとは思いませんでした。

2日後の5月5日に石狩浜を訪れた時には、すでに移動してしまったのかオオチドリを観察することができませんでした。この個体が無事繁殖地に渡り、無事繁殖を終え再び越冬地に戻ってくれていることを祈ると共に、このような珍しい種に限らず、飛来する鳥にとって魅力的な石狩浜の環境が今後も絶えず続くことを心から願っています。



野幌森林公園

2017. 7. 9

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、キジバト、アオバト、アオサギ、ツツドリ、トビ、コゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤブサメ、センダイムシクイ、トラツグミ、クロツグミ、キビタキ、オオルリ、カワラヒワ、アオジ

以上23種

【参加者】秋山洋子、阿部 徹、今村三枝子、扇谷真知子、大表順子、笠井好美、栗林宏三、後藤義民、白澤昌彦、高橋利道、辻 雅司、辻田捷紀、畑 正輔、早坂泰夫、樋口孝城、久藤孝一、廣木朋子、辺見敦子、本間康裕、松原寛直・敏子、三井 茂、本杉政司・朋子、門馬公生、山本育子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子

以上29名

【担当幹事】後藤義民、早坂泰夫

石狩川河口

2017. 8. 20

札幌市中央区 久藤 孝一

70歳を過ぎてから鳥を見るのが好きになりました。理由は多分、西岡公園で植物観察をしていた時に木の幹を下から登っていく、小さくてスマートな鳥を見ました。あの鳥は何という鳥ですかと聞いたら、キバシリと教えてくれました。なんで木の幹を登るのかな、よく落ちないかと疑問に思い興味を持ったのが始まりでした。

興味は持ったけれど、名前を覚えるには、必要な何かがよくわからなかったので、ウォッチングガイドに載っていた野幌森林公園の探鳥会に参加しました。参加して問題点が幾つかありました。一つは、今囁かれていますと言われても全然聞こえません。加齢による難聴で特に高い音は聞き取りにくいのです。二つ目は、あそこの枝の先にオオルリがいると言われて見るのですが見つけれません。視力が相当衰えていたのです。という決定的な問題点が分かりましたが、初めての探鳥会はベテラン会員の方々の方が親切丁寧に説明して下さい、又、皆和気藹々の雰囲気です充実した有意義な一日を過ごすことができました。

今回は2回目の参加になります。どんな鳥が見られるかわくわくしながら石狩浜のヴィジターセンターへ向かいました。開始前に感想文をお願いしますと言われ、参加者は全員提出するのだと思い軽く引き受けました。後で会報誌に載せるので早めに提出してくださいと言われ、帰りは少し気が重くなりました。

開始前にはオジロワシが大空を悠々と羽ばたいており、電柱の電線にはカワラヒワが数羽止まっており幸先のいい出だしでした。ヴィジターセンターから浜に出てすぐにエリマキシギが波打ち際でエサをついばんでいました。近い20~30m先です。幼鳥だそうで、大勢の人に観られながら余り気にしていない様子です。石狩川河口に近づき鳥の種類も、数も多くなってきました。その中で特に目についたのがミサゴでした。海辺の空を颯爽と飛び、停空飛翔から急降下し、水面に飛び込んで魚を捕らえる。急降下捕獲の様子は4回ありました。1回目は魚を掴んで上昇するとき落としてみたいで失敗。2回目は見事成功、少し小さな魚でした。3回目は大勢の人が見ている前で注目を浴びながら敢行しましたが失敗。少し恥ずかしそうに上昇しましたが、諦めずすぐに停空飛翔に入り4回目に挑戦。今度は見事30cm位の魚を捕獲、頭を前にして両足を挟んで運んでいきました。一度失敗しても諦めずに再挑戦するということをミサゴから学びました。河口の先端の小さな砂州に十数羽のトウネンがエサを探しながらせわしなく歩き回っていました。チドリ目シギ科の旅鳥だそうで、私は初めて見る鳥でした。河口から石狩川沿いに進路を変えていくと、対岸の流木の枝先にミサゴとアオサギが止まっていました。あまり動かないという印象でした。管理道路から東屋を通り、草原性の鳥はホオアカ、ノビタキ、ヒバリがいたそうですが私は確認できませんでした。

今回の探鳥会に参加させていただき、初めて見る鳥、エリマキシギ、ミサゴ、トウネンを自分の眼で確認でき、又、ミサゴの狩りの様子も見る事ができて、本当に貴重な体験をさせていただき感謝しております。これからも機会があれば参加したいと思います。



エリマキシギ (写真撮影 佐藤智子さん)

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、シロチドリ、オオソリハシシギ、トウネン、エリマキシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ミサゴ、トビ、オジロワシ、カワセミ、ハヤブサ、ハシブトガラス、ヒバリ、ノビタキ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオアカ

以上19種

【参加者】池田光優・紀美江、今村三枝子、岩井幸子、岩井 茂、遠藤明美、河野美智子、久藤孝一、媚山陽子、齋藤由美子・佑朱、佐藤香織、佐藤啓子、佐藤 尚・智子・尚也・佳乃子、品川睦生、島田芳郎、白澤昌彦、高橋きよ子、高橋貞夫、立田節子、田辺英世、辻 雅司、徳田恵美、戸津高保、中間 徹・芳枝、畑 正輔、早坂泰夫、原美保、美頭佳範、樋口孝城・陽子、藤岡千鶴江、本間康裕、松原寛直・敏子、紅葉昭彦、門馬公生、山室ゆかり、横山加奈子、吉田慶子

以上44名

【担当幹事】畑 正輔、横山加奈子

鶴川河口

2017. 8. 27

苫小牧市 和歌月 里佳

今回初めて探鳥会に参加させていただきました。普段は、ウトナイ湖で鳥を見ることが多いのですが、シギやチドリは中々見られる機会が少なかったこともあり、鶴川河口での探鳥会を楽しみに伺いました。

鶴川の道の駅・四季の館で集合した後、鶴川河口まで歩きました。道すがら、鳥が飛んでいると声があがり、皆でそちらへ向いたと思ったら、また別のところで、声が上がリ、まさに一人で鳥を見ている時には考えられない、探鳥会ならではの醍醐味を身に染みて感じました。河口へ向かう途中、草原にノビタキが姿を見せてくれました。また、オオタカやオジロワシなどの猛禽類も見られ、水辺に近づくと、オオセグロカモメやウミネコがずらりと並ぶ姿が。その迫力に圧倒されていると「カワセミだ」との声が。

そして、「シギ、チドリはいるかな」と思ったそのとき、リーダーの方たちが水辺を歩くトウネンを発見。一生懸命動き回る姿をしばらく観察しました。その後、トウネンたちは一斉に別の場所へ飛んで行きました。さらに歩いて行くと、近くの水辺を一羽のトウネンが歩いており、驚かさないうように距離を保って、観察しました。

探鳥会に参加して沢山の鳥たちを見られたことはもちろん、リーダーの方や参加者の方々と色々とお話してきたことがとても嬉しく、また参加したいと感じました。

今回の探鳥会で、コアホウドリの死亡個体が浜辺に打ち上がっているのが発見されました。準絶滅危惧種IB類のコアホウドリの死亡個体が、大きな腐敗が見られない状態であったこともあり、その日のうちに、環境省の施設であるウトナイ湖野生鳥獣保護センターへ運びました。

後に環境省の担当官へ確認したところ、道北と道南で保護されたコアホウドリの個体を、同センターで獣医師の

下、治療。その後、放鳥可能と判断し、探鳥会の数日前に日高付近の海岸で放鳥しており、その個体であると示唆されることのご回答をいただきました。

また、このコアホウドリの死亡個体は、今後の保護政策のために調査研究に使われるとのこと。

【記録された鳥】 マガモ、カルガモ、ウミアイサ、キジバト、カワウ、ウミウ、アオサギ、ダイサギ、ミユビシギ、トウネン、ウミネコ、オオセグロカモメ、トビ、オジロワシ、オオタカ、カワセミ、チゴハヤブサ、ハヤブサ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、イワツバメ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ 以上25種

【参加者】 阿部勝利、今堀魁人、小野寺まゆみ、門村徳男、川東保憲・知子、河野美智子、品川陸生、島崎康広、島田芳郎・陽子、鈴木勝之、谷岡康孝、辻 雅司・方子、寺島英昭・浪子、戸津高保・以知子、早坂泰夫、原 美保、美頭佳範、本間康裕、山口裕史、吉田慶子、和歌月里佳、鷺田善幸 以上27名

【担当幹事】 門村徳男、島田芳郎

野幌森林公園

2017. 9. 3

【記録された鳥】 マガモ、カイツブリ、キジバト、アオサギ、トビ、コゲラ、ヤマゲラ、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ゴジュウカラ 以上13種

【参加者】 岩井幸子、大内康典、大表順子、川東保憲・知子、栗林宏三、後藤義民、笹森繁明、佐藤香織、下川広夢・進夢、辻 雅司、辻田捷紀、中村 隆、畑 正輔、樋口孝城、福本清昭、本間康裕、松原寛直・敏子、本杉政司・朋子、門馬公生、山本育子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子 以上27名

【担当幹事】 辻 雅司、本間康裕

いしかり調整池

2017. 9. 10

札幌市東区 佐藤 香織

初めまして。2017年5月に入会した佐藤香織と申します。バードウォッチング歴はまだ1年未満で野鳥のことを少しずつ勉強中です。いつも同時に入会した人と参加しています（外見が似ているので姉妹と間違われたりしますが、姉妹や親類ではありません）。

さわやかな秋風が吹く9月10日、いしかり調整池で行われた探鳥会へ参加しました。いしかり調整池は2007年3月に完工した約454m×334mの長方形の池で、農業用水として利用されており、8月後半に水が抜かれはじめて干潟状態になるとサギ、シギ・チドリ類が集まり、その水鳥を狙う猛禽類が飛来することもあるという野鳥観察には絶好の

場所とのこと。

池に到着するとあちこちに佇むダイサギの白い姿が目を引きました。会長が「コサギもいるなあ」とおっしゃるので双眼鏡でよく観察するとダイサギやアオサギの中にコサギを見つけることができました。その後は池の周囲を2時間ほどかけて歩きながらゆっくりと観察しました。塀のへりの上にカワセミも現れて、くつろぐその姿をフィールドスコープなども使いながらほぼ全員で楽しみました。塀の下の方にはトウネンやタカブシギがぴったり寄り添っておりその姿もじっくり見ることができました。また、調整池から数メートル離れた用水路にはタシギが現れて、数名が運よく飛んでいく姿をとらえることもできました。オジロワシやトビなども上空を気持ちよさそうに旋回していました。この日観察できたのは20種類となり、例年よりも個体数が少なめとのことでしたが天気にも恵まれて充実した探鳥会となりました。

探鳥会終了後は池のサギ達を眺めながら昼食をとって、場所を移動して「デジタル・バードウォッチング」にも参加しました。バードウォッチングを始めたばかりの私は知らないことばかりで、知識・経験豊かなスタッフによるスライドショーを毎回とても楽しみにしています。この日は見てきたばかりのシギの見分け方の話がありました。教えていただいたことを基に次にシギを見つけたときは自分でも識別できるようになりたいと思います。まだまだ初心者ではありますが今後ともよろしく願いいたします。

【記録された鳥】 キジバト、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、タシギ、タカブシギ、トウネン、トビ、オジロワシ、カワセミ、モズ、ハシブトガラス、ヒバリ、ノビタキ、スズメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ホオアカ、アオジ 以上20種

【参加者】 阿部勝利、阿部真美、岩井幸子、大表順子、大内康典、太田由美子、小谷内久江、鹿川美咲、金子喜映・洋子、菊池るり子、栗林宏三、媚山陽子、近藤章子、佐藤香織、佐藤 尚・智子・尚也・佳乃子、品川陸生、島田芳郎・陽子、白澤昌彦、菅 和洋・美紀子、高橋貞夫、高橋宣子、田隈泰信、竹田芳範、田中ひろ子、田中冬彦・幸子、田中 陽・雅子、田中慶洋、田辺英也、田守真一・敦子、辻 雅司・方子、網島詔雄・征子、徳田恵美、戸津高保、中田勝義、原 美保、美頭佳範、樋口孝城・陽子、藤岡千鶴江、松原寛直・敏子、道川富美子、村田睦子、本杉政司・朋子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子ほか2名 以上61名

【担当幹事】 島田芳郎、樋口孝城

宮島沼

2017. 10. 1

岩見沢市 先崎 愛子

秋晴れの少し肌寒い朝、宮島沼での探鳥会に参加しました。到着してすぐ、沼の水面に群れで気持ちよさそうに浮

かぶマガンとヒシクイが目飛び込んできます。群れの数もピークに近く、端から順にカリガネやシジュウカラガンを探していると、あっという間に時間が過ぎてしまいます。時折、沼の周りをヒラヒラと飛ぶ綺麗なチュウヒの成鳥や空高くを滑るように飛ぶハヤブサの幼鳥も姿を見せました。特にチュウヒは餌探しに夢中で、いつの間にか大勢の観察するすぐ近くを飛翔し、目の前で脚を出し、翼を広げて芦原の中に急降下してハンティングするダイナミックな姿を見せてくれました。その後も、今朝、一部の方が確認し、出て行ってしまったさきりのシジュウカラガンを沼に休みに戻ってこないかと何度も群れをチェックしますが、ついに確認ならず終了の時間。シジュウカラガンを見られなかったのは残念でしたが、この不幸のおかげでマガンやヒシクイ、カルガモなどの“いつもの顔ぶれ”をじっくりと楽しんで観察できました。また、女性の参加者の方も多く、人見知りの私に気さくに声を掛けて下さり、お話が出来たのも大変ありがたかったです。近頃つつい、次へ次へと駆け足で探鳥することが多かったため、ホッと一息つけた充実した休日になりました。

【記録された鳥】ヒシクイ、マガン、シジュウカラガン、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、オナガガモ、コガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、キジバト、カワウ、アオサギ、ダイサギ、トビ、チュウヒ、ハヤブサ、ハシブトガラス、ヒバリ、ムクドリ、カワラヒワ、アオジ、オオジュリン

以上30種

【参加者】阿部勝利、白田 正、大表順子、北山政人、栗林宏三、近藤、佐藤 尚・尚也、佐藤ひろみ、漆崎 修、品川睦生、島田芳郎・陽子、先崎愛子、辻 雅司・方子、富川 徹、畑 正輔、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城、松原寛直・敏子、山室ゆかり、吉田慶子

以上25名

【担当幹事】北山政人、佐藤ひろみ

野幌森林公園

2017. 10. 8

岩見沢市 下川 進夢 (中学2年)

2017年10月8日の探鳥会に参加させていただきました。森に入るとシジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラなどがたくさん見られました。突然、目の前にハシブトガラが現れ、慌ててカメラを向けましたが、シャッターを切る前に飛んで行ってしまい残念でした。その後、空を見ながら歩いているとかなり遠くに猛禽類が飛んでいるのを発見して何とか1枚とることができ、すぐに確認してみると、なんとノスリでした。腹が黒っぽいことがわかりました。そして楽しみにしていた大沢の池ではオシドリの群れを観察できました。オシドリのオスの羽の色を見ると、とても色鮮やかで感動しました。昼食を食べてトイレに行っている途中、森の中からキョーンという鳴き声が出て、1人で静かにしているとまた鳴きました。その後、探鳥会が無事終了して、家であの鳴き声を調べているとクマゲラと一致しました。見られませんでしたでしたが初めて声をきくことができたのでとてもうれしかったです。これからも探鳥会に参加できる機会があれば行きたいと思いました。どうもありがとうございました。

【記録された鳥】オシドリ、マガモ、コガモ、キンクロハジロ、スズガモ、カイツブリ、キジバト、トビ、ノスリ、カワセミ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、クマゲラ、カケス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヤマガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、ウグイス、ゴジュウカラ、アオジ

以上24種

【参加者】朝倉佳文、阿部 徹、石井正訓、大表順子、川村宣子、栗林宏三、媚山陽子、漆崎 修、下川広夢・進夢、杉田範男、田辺 至、辻 雅司・方子、長尾保秀・由美子、畑 正輔、早川嘉彦、早坂泰夫、樋口孝城、久藤孝一、藤岡千鶴江、辺見敦子、本間康裕、松原寛直・敏子、道川富美子、三井 茂、本杉政司・朋子、山本昌子、山本康裕、横山加奈子、吉田慶子

以上34名

【担当幹事】栗林宏三、道川富美子

表紙の鳥

カラフトムシクイ

豊平公園(札幌市豊平区)に立ち寄った際にカラフトムシクイの飛来を知り、翌日運よく初撮りできました。観察記録の少ない珍鳥を見ることができ、感激です。都会の中にある公園にもかかわらず、春と秋には観察難易度の高い種が多く立ち寄り、バーダーやカメラマンを楽しませてくれます。本種は2年前にもこの公園で観察されていて「北海道野鳥だより」(第183号)に記録が紹介されています。

中村 隆(札幌市南区)





【小樽港】2018年1月21日(日)

札幌から貸し切りバスを利用して行きます。日和山灯台付近、祝津漁港、フェリーターミナルを回り、海ガモ類、カモメ類、アビ類、ウミガラス類などを観察します。

参加希望者は、お申込み下さい。

集合場所・時間：札幌駅北口(中央)「鐘の広場」8:00
小樽駅からの参加も可能です。
(小樽駅前からの乗車9:20頃)

帰着時間：16:00頃 (小樽駅前での降車14:40頃)

定員：45名

参加費：2,000円(当日徴収)

申込先：畑 幹事

1月5日(金)から8日(月)の毎日9:00~20:00まで
電話・E-mailにて受け付けます。

(乗降場所を指定してください。E-mailの場合、電話番号も明記願います。)

なお、定員になり次第締め切ります。

電話 011-894-0017

携帯電話 090-3117-4261

E-mail: hata2002@lapis.plala.or.jp

その他

- ・小樽駅で小休止してから探鳥コースに入ります。
- ・フェリーターミナルで昼食をとります。
- ・往復とも小樽駅以外の途中乗車・下車はできません。

【野幌森林公園】2018年2月4日(日)

冬の野幌森林公園で雪を踏みしめながら、ツグミ、アトリ、マヒワなどの冬鳥、キツツキ類、カラ類などを観察します。12時頃に大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。

昼食はふれあい交流館でとることができます。

集合：野幌森林公園大沢口 9:00

交通：夕鉄バス 新札幌駅発(文京台南町行)

「大沢公園入口」下車 徒歩5分

JRバス 新札幌駅発(文京台循環線)

「文京台南町」下車 徒歩5分

【円山公園】2018年3月4日(日)

春の訪れを迎えた円山公園内で、キツツキ類、カラ類に加え、ツグミ、マヒワ、ウソ、シメなどを観察します。

午前中で解散の予定です。(昼食は不要です)

集合：円山公園管理事務所前 9:00

交通：地下鉄東西線「円山公園」下車 徒歩 8分

【ウトナイ湖】2018年3月18日(日)

南で冬を過ごしたガン・カモ類がこの時期北の繁殖地に渡り始めます。渡り鳥の中継地であるウトナイ湖で多くのガン・カモ類、オオワシ、オジロワシなどを観察します。湖岸をネイチャーセンターまで歩きます。正午頃にセンター内で鳥合わせをし、解散となりますが、同じ場所で昼

食をとることができます。

集合：ウトナイ湖野生鳥獣保護センター前 9:30

交通：道南バス 新千歳空港発(苫小牧行)

「ウトナイ湖」下車 徒歩5分

☆ いずれの探鳥会も悪天候でない限り実施します。

☆ 昼食、観察用具、筆記具などをご持参ください。

☆ 問い合わせ先：北海道自然保護協会 ☎011-251-5465

10:00~16:00(土・日、祝祭日を除く)

鳥民だより

◆新年講演会のご案内◆

・日時 2018年1月13日(土) 13:30~16:30

・場所 かでる2・7(北海道立道民活動センター)
520研修室

札幌市中央区北2条西7丁目(011-204-5100)

・講師 富川 徹氏(北海道野鳥愛護会副会長)

・題名 シマアオジの回復保全を願いながら

—マイフィールド(野幌森林公園、宮島沼、
礼文島)の鳥類標識調査と鳥たち—

環境省の種の保存法の一部改正(2017年9月21日施行)により、シマアオジも国内希少野生動物種として追加されることになり、ようやく国における本種の回復保全に向けた取り組みが始まったといえます。

私は、及ばずながら鳥類の渡りなどを調べる鳥類標識調査を行っており、2015年10月に礼文島でシマアオジ1羽を捕獲し、抜け落ちた羽毛からDNAの結果も得ました(本誌10頁参照)。

新年講演会では、鳥類標識調査の意義をはじめとして、私の行っている主な調査地の野幌森林公園、宮島沼、礼文島の3地域における調査結果の概要を示しながら、これまでに分かってきたことなどについて、シマアオジの捕獲も含めてお話したいと思います。また調査地や周辺で観察された鳥たちについても画像で紹介いたします。

・野鳥写真上映会 (講演終了後、15:00頃から)

会員の皆様が撮影された写真を上映します。映写時間を調整するため、映写を希望される方は事前に連絡をお願いします。

連絡先：高橋幹事 (brb32264@nifty.com)

当日、写真をUSBメモリ等にコピーしてお越し下さい。

・参加費 500円

・懇親会 新年講演会終了後、「ユック」(札幌市中央区北1条西5丁目興銀ビル地下1F)で行います。会費は3,500円程度です。参加自由で、事前申し込みは不要です。

【新しく会員になられた方々】

佐藤 奈緒美 (札幌市厚別区)

【北海道野鳥愛護会】年会費 個人 2,000円、家族 3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465

HPのアドレス <http://www.aigokai.org>